

松下幸之助記念志財団 研究助成

## 研究報告

(MS Word)

【氏名】 鈴木静香

【所属】 (助成決定時) 大阪大学 連合小児発達学研究所 (福井校) 発達環境支援学 博士課程

【研究題目】 被虐待児と自閉スペクトラム症児の初期徴候に関する研究

## 【研究の目的】 (400字程度)

現在、世界的規模で感染の拡大が広がっている新型コロナウイルスの問題に関連した景気後退や学校の休校等によって、家庭における児童虐待が増加する危険性が指摘されている (The United Nations,2020)。多くの被虐待児が過ごす児童養護施設での適応行動に関する質問紙調査結果などから、被虐待児には社会性の問題があることが報告されている (宮地ら,2014)。近年、社会性に関する評価指標として「視線」を用いることの有用性が示唆されており (Guillon et al.,2014)、自閉スペクトラム症特性の徴候を視線計測で発見する試みも現在行われている (Ahmed et al.,2022)。一方、被虐待児でも視線パターンの非定型が報告されており (Mastorakos & Scott,2019)、自閉スペクトラム症群と様相が類似した点も多いが、その質的な違いについては明らかになっておらず、特に幼児期の子どもについての研究は少ない。そこで、本研究は簡便で乳幼児でも使用可能な視線計測器である Gazefinder® (以下:GF, 関連文献:Fujisawa et al,2014,Fujioka et al,2016) を用いて、被虐待群と自閉スペクトラム症群,それぞれの視線に関する早期徴候や相違点等を明らかにするとともに、心理・行動上の特性やホルモン量との関連を調べ、鑑別診断指標開発への展望を示す事を目的とした。

## 【研究の内容・方法】 (800字程度)

## 調査協力者

&lt;被虐待群 (以下 CM\*群) &gt;

乳児院や児童養護施設等に在院する子どもで、被虐待歴のある子ども 18 名

&lt;自閉スペクトラム症群 (以下 ASD 群) &gt;

一般家庭環境下で養育されている ASD の診断を受けた子どもで、被虐待歴のない子ども 15 名

&lt;コントロール群 (以下 TD\*\*群) &gt;

一般家庭環境下で養育されている発達障害がなく被虐待歴もない子ども 20 名

※調査時点において CM 群、ASD 群、TD 群においてともに知的な遅れがなく (IQ あるいは DQ70 以上)、CM 群と TD 群においては、発達障害の診断がついていない事とした。年齢は 3 歳半から 9 歳の子どもとした。\*CM: Children with maltreatment, \*\*TD: Typical Development

## 調査内容・方法

## 〔研究 1〕

調査協力者である対象児に対して、GF を利用し注視点分布を計測した。①顔刺激 (刺激数は 5 項目、「目領域」への注視率とそれ以外の「口領域」等への注視率を測定)、②バイオロジカルモーション (刺激数は 1 項目、正立面と逆立面の動きへの注視率を測定)、③人物と幾何学模様 (刺激数は 2 項目、人物への注視率と幾何学模様への注視率を測定)、④指差し (刺激数は 1 項目、指差しの方向とそれ以外への注視率を測定)。

また、対象児を担当する施設職員 (ASD 群と TD 群においては保護者) に対し、質問紙 (①基本的属性、②逆境的小児期体験 [ACE] 尺度、③子どもの強さと困難さのアンケート [以下:SDQ]、④養育問題のある子どものためのチェックリスト [以下:CMT1]) を実施して群間比較を行い、それぞれの群の特徴について分析を行った。

## 〔研究 2〕

対象児に対して唾液を採取し、ストレスと関連が深いと言われているコルチゾールホルモン (以下:CH) 量を測定し、それぞれの質問紙の結果や視線との関わりについて分析を行った。

\*当初予定していたオキシトシンホルモン測定試薬がコロナの影響で海外から購入できなかった為コルチゾールホルモン測定試薬を代替として使用。よって研究 2 の調査・分析対象は ASD 群のみ。

#### 【結論・考察】（４００字程度）

CM 群, ASD 群, TD 群における視線計測データについて分散分析を行った結果、正立画への注視率に関してグループ間で有意差が見られた [ $F(2, 50) = 3.24, p < .05$ ]。多重比較により CM 群は, TD 群に比べて正立画への刺激をよく見ない傾向があり、非日常的動作である「逆立画」や画面上の他の領域にも視線が分散していることが分かった。また選好人への注視率に関してもグループ間で有意差が見られ [ $F(2, 50) = 6.12, p < .01$ ]、CM 群は TD 群・ASD 群よりも人物画像をよく見る傾向にあり, ASD 群が最も人物画像を見ない傾向が確認された。一方で ASD 群の心理・行動上の特性と CH 量との相関を見たところ, SDQ のスコアが低いほど, CH 量が高いという傾向が見られた ( $r = -0.58, p < .05$ )。

以上の結果から CM 群は TD 群に比べ周囲の状況をより広範囲で捉え, TD 群や ASD 群よりも人物の様子をより詳しく見て確かめようとする傾向が見られた。その傾向から CM 群は被虐を回避するなど防衛反応の高さや警戒心が強いことが推察された。一方で ASD 群は人よりも図などに興味を持ちやすい一般的な ASD 傾向と同様の結果となった。ホルモン量と SDQ スコアの関係としては, 心理・行動上の問題が少ないと周囲から判断されている子ほど, 実は多くのストレスを抱えている可能性をうかがわせる結果が得られた。本研究により被虐待群と自閉スペクトラム症群、それぞれの早期徴候や相違点等が明らかになり、視線計測等を通して様々な背景や発達特性を持つ子どもを発見し、適切な環境支援を早い段階で整備する事の重要性が示唆された。